

2 恋果て止めて

こい は て と め て

まにふいくみやほか **Fukapon**

帰宅した彼女が部屋のドアを開けると、見知った少女の笑顔があった。

「お帰り」

にんまりと。そんな表現が似合う含みを持ちながら、決して嫌な笑みではない。

向けられた表情の理由がわかってしまった彼女は気恥ずかしそうに、目を伏せがちに挨拶を返している。

「た、ただいま」

「言うことは、それだけ？」

「そ、そうだよ？ 帰ってきたんだから『ただいま』だよ……」

彼女は引き続きにやつく少女から目を逸らして、誤魔化すよう努めているが。後ろ手のドアを閉め切れないまま立っている姿に、落ち着きが全くない。その正面、彼女のベッドに腰を掛け脚を組んだ少女は、むろん追求の手を緩めはしなかった。

「ふうん、せっかく先輩と二人きりにしたげなのに、そーゆーことゆーんだ？」

得るべき回答は少女の心中にあり、同等の回答が出てくるまでは許すつもりがないらしい。少女の考えていることは彼女にもわかっており、観念することにした。

「え、あ、え、と、桐子あの、その、ね……」

「保健室で懂れの先輩と二人きり。きゃーっ、もう大切なものあげちゃってたりして？」

「あ、えと、う、うん……」

「……うん？ は、はいっ？」

窮鼠、猫を噛む。

猫は豆鉄砲を食らった鳩だったけれども、それは、びったりの

諺だった。

「なんだもう、びっくりさせないでよお。キスカあ、そうかあ、でもそれだって凄いいね？ だって今日初めて話したんでしょ？」

彼女たちにとっては重大な行き違いに気付いた後、心の底から安心しましたという風な少女。森田桐子、十六歳、高校一年生。まっすぐと背に伸びた黒髪を有する長身が、凜とした清らかさを感じさせる。しかし話す様子はそぐわず、あっけらかんとした女の子。

「そ、そう、初めて……。それに、その、み、道の真ん中だった、から……」

幼馴染みの前で大切な、ファーストキスの一部始終を白状させられ、弱っている理由はそのファーストキス自体。一言紡ぐたびにオロオロする姿が可愛い少女は、佐川綺月。同じく十六歳の高校一年生。肩に掛かる長さのウェーブヘア、割と高い身長から大人っぽい外見だが、やはり様子はそぐわず、顔を真っ赤にして俯いている。

「いいなあ、綺月。私にも誰かしてくれないかなあ」

「よくないよう。き、っキスは嬉しいんだけど……、誰かに見られてたかも知れないし……」

「えー、それが羨ましいよー。人のいないところでこっそりつてもそれはそれでいいんだけど、周りなんか気にしてないよって堂々とやってくれちゃうのって嬉しくならない？」

「な、ならないよお。もう、ホントに、恥ずかしくて……」

きゅーっ拳を握り、座ったベッドの端っこをぐりぐりしてい

る綺月は、今でも本当に恥ずかしそう。顔は真っ赤、瞳は涙多めでうるうるしている。

一方の桐子は自分のことのように大喜びした様で、何度聞いても飽きません、何度見ても飽きませんと綺月を翻弄していた。

女子高生と言えは恋愛、などと言うことは決してないだろうが、その手の話で盛り上がるのは事実のところがあった。けれども彼女たちに、そんな一般論の枠に収まらないところがあるとしたら。

「でもさ、女の子同士だったら、普通に結構ありんじゃない？」

「えっ？ そうかな？」

「だってほら、友達同士でも手を繋いだり、じゃれ合ったりするでしょ。私たちだってそうだし」

「あ、そうだね。……そうだ、ね。そっか……、先輩にとって」

俯いたままの表情の雲行きが変わったことを察し、桐子は綺月の言葉を遮った。

「そんなことないよ。周りからそう見えても、綺月は、違うんでしょ？」

彼女の口調は一変し、まさに凛とした声で、正鶴をまっすぐ射るかのよう。

「うん。私は、……先輩が好き」

笑顔が放つ鋭利な言葉は、綺月を守るため、綺月の不安を正確に射貫いた。だから綺月は、ハッキリ、自らの想いと、自らの想いとを、信じてることができた。

顔を上げ、強い眼光の視線を返した綺月に満足し、桐子は小さく頷く。そして綺月の両肩に手を置き、少し抱き寄せようとしながら。

「きゃっ、綺月ったら言ってくれちゃってえっ。『先輩が好き』

だってさあ、のろけんなよこんにゃろー」

まさに今感動的なシーンというところで、桐子はまたけたけた笑い、からかい出した。

「えっ？ あ、そ、そういうんじゃないかって、えっと」

綺月の方も元に戻って狼狽している。ひょっとしてからかわれた？ と恥ずかしくなっている。のではなく、単純にどうしたらいいのかわからないようだ。

「あーそーですか、先輩も私が好きとか言いたいわけね？ あーやだよ、これだから恋人付きの人間は嫌だよねえ」

「だから、そんなつもりじゃないんだってばあ」

畳み掛けるようにおちゃらける桐子。さすがに幼馴染みらしく、綺月も案外早く順応して。

綺月の細い腕が桐子の豊かな胸をポカポカと、じゃれるように叩きだした。

——今日、泊まっていってもいい？

その提案はいつも通りあっさりを受け入れられ、桐子は夜更けに一人、綺月の部屋にいた。

綺月は今、お風呂に入っている。本当は一緒に入ろうと誘おうかとも思ったが、昼間のこともあるので自重して、先に一人で済ませてきてしまった。

桐子にとっても綺月の部屋はもはや見慣れたものだが、改めて見直す。よく整理されており、無駄なものほとんど置かれていない。目に付くのは今、彼女が座っているベッドと、机と椅子、キャスター付きのカラーボックスぐらいのものだ。洋服持ちの綺

月だが、服はベルトインのクローゼットにいちいち収納しているらしい。部屋中のあらゆるところにハンガーを引っかけてしまう桐子とは大違いである。

整然とした綺月の部屋にはもう一つだけ、目立つものがある。机の上に置かれた、写真立て。桐子はベッドから立ち上がると、それを丁寧に手に取り、何の気なしに見つめた。

(みんな、こういうことするのかなあ?)

アクリル樹脂でできた写真立て。飾られた写真は綺月の片想いの相手、笹原紅深(さき)のものだ。数年前のものであろうが、それでも大人びて見える整った顔つき。けれども体型はいわゆる幼児体型そのもので、顔を見なかつたら小学生と間違えてしまいそうなくらい。そんな女の子が写った写真。

人並みに初恋ぐらいいは済ませていたが、誰かと付き合った経験はおろか、そもそも付き合いたいと思うほど好きになつたことはない。故に「好きな人の写真を飾る」という行為が、桐子には今ひとつ理解できなかった。

(人目を忍んで、ぎゅーってしちゃったりするのかな?)

桜並木の中、制服を着た紅深が明るい笑顔で写っている。確かに、抱きしめたくなるほどに可愛い絵だ。

尤もこの写真立ては、桐子が写真入りでプレゼントしたものの。けれどもそれは冗談半分で、まさかかれこれ一年以上も飾られようとは思っていなかった。

綺月が階下から戻ると、桐子が背を向けて立っている姿が目に入った。

綺月はカナリア色のごくごく普通のパジャマを着て、少し上気

した頬に赤みが差している。普段から化粧はあまりしたくないため、日中と何ら変わりのない雰囲気。

「何してるの?」

綺月は彼女の視線を追うべく、色違いのお揃いパジャマに包まれた、桐子の右肩越しで背伸びをする。と、当然写真立てが目に入ってしまう。

「……っ!」

「これ、飾ってるんだね」

息を呑む綺月には全く気付かない様子で、桐子はあっさりと答えている。

その様子に悪びれた風はなかったが、綺月にはそう感じ取る余裕など全くない。

「……うん。あまり、見られないから」

顔を真っ赤にして目を泳がせながら、小さな声で発すると、しばらくの沈黙が訪れた。

早くこの話題から離れて欲しいと願う綺月に対し、桐子は何を考えているわけでもない。ただ単純に、そういうものかなあと思っていたのだが。ふと隣を見れば、なんだか恥ずかしそうにしてる女の子がいることに気付いてしまった。

——にやり。

そんな擬音が聞こえてきそうな一瞬である。

明らかに変わった語気を伴い、桐子は瞳だけで綺月の方に向き直り。

「へえ、綺月ってば先輩の写真をそんなことに使ってるんだあ」
「つ、使ってるだなんて、そんなことしてないよっ」

綺月は素直すぎる子で、からかわれるととにかく弱い。桐子と

のやりとりではいつも、桐子に翻弄されっぱなしだ。今回もその真偽はさておき、桐子の思うつぼである。

「あーら、『そんなこと』ってどんなことかなあ?」

「つ、と、え、あ、なんでもないよ」

「先輩に言っちゃおうかな。綺月は写真を見て一人でするようなはしたない子ですって」

「やめてよ、お願いだってばあ。あーつ、写真返してようっ」

写真を左手に持ち背伸びする桐子に、必死にしがみつき付き。

手をバタバタさせて写真を取り返そうとするが、もともと桐子の方が身長も高いだけに、届きっこない。

綺月が反対側に戻って腕ごと引きずり下ろそうとすると、桐子は写真立てを右手に持ち替え、「こっちだよ」と遊んでいる。

大切なものを取り上げ悪戯する子どもと、取り上げられ慌てる子どもとが追いかけっこ。そんなじゃれ合いが部屋の中で繰り返された。

けれども二人は、本当は子どもなんかじゃないから。

——ポフッ。

桐子は仰向けに、ベッドの上に倒れ込んだ。

「はい、返却」

ベッドから垂直に伸びた腕は、写真立てを丁寧に受け渡した。

綺月は写真立てを抱くと、とても安心した表情で、桐子に言葉返しした。

「ありがとう。私、この写真のおかげでがんばれるんだ」

どこか遠くを見ているような表情としみじみとした口調に、桐子は少しだけ、わかった気がした。

机に戻された先輩の笑顔は、部屋の灯りとともに見えなくな

った。

シングルベッドで仲良く、二人並んで布団に入る。

そして穏やかな声が、真っ暗闇に溶け出す。

「ごめんね」

「ううん、別に気にしてないよ」

予想通りの答えが返ってきたが、綺月はきつと、わかっている。そう思う桐子は、もう少し続ける。

「昼間のこと。私がやりすぎた」

「あ、それなら。私もごめん」

すっかり影が薄くなっていったが、二人は今日の昼、喧嘩をしたのだ。大した理由での喧嘩でもなかったが、謝らないとすっきりしないのは二人とも同じだったらしい。

「でもそのおかげで、その、先輩と……」

「そっか、ありがとう」

二人の喧嘩が元で、綺月と紅深はキスをした。その事實は二人にとって全く異なる感情を与えている。

「私の初恋の人は、綺月だったんだよ」

「え?」

「小さい頃は、綺月のお嫁さんになるんだって、思った」

「……」

「昔の話だからね、今じゃないよ? 深刻に聞いちゃだよ?」

「そっか。よかった」

「よかったって……。まあ『よかった』か。だからね、たまに、綺月が離れていくのが嫌な時がある」

「私は、桐子から離れたくないよ」

その証とでも言わんばかりに、布団の中で、綺月は桐子の手を握る。今ではすっかり慣れたその感触、桐子の手はとても柔らかくて、華奢なのだ。けれども綺月のそれよりもずっと迷いが無い。細い指が少し骨張った綺月の指を捉えると、恋人繋ぎで結ぶ。

少し前まで、桐子と恋人繋ぎすることが恥ずかしかった。けれども、今は違う。綺月が綺月でいられるための、おまじないですらある。

「そりゃそうなんだけども。ハッキリ言っちゃうと、先輩に負けたくないって言うか」

「……」

「だからさ、そーゆー時は『私は先輩が好き』って言って」

「……いいの？」

「いいの。そう言われると、綺月が側にいるんだなって、気がするから」

「変なの」

「変かな」

ふと横を向くと、暗闇の中お互いの顔が見えた。

ユツンとおでこを、ぶつけ合った。

「例えばだよ？」

改めてしゃべり出した桐子の口調は、お馴染みの悪戯っぽさを持ち合わせていた。

「うー、もういいよう」

綺月もあっさり感づいたが、桐子はお構いなしに続ける。

「綺月が先輩の写真で一人エッチしてたとして」

「してないってばあつ」

「例えば、仮に、だよ。その一人エッチの事実を知ることができ

る人って、笹原先輩以外の、近くにいる人だけだと思おうの」

「それは、そうだろうけど……」

「私の居場所はそこ。だから、隠さないでいいんだよ？」

戯ける桐子の口調の端に、切なさと呼ばれる類のものは微塵も無い。

綺月と桐子。この二人は幼馴染みで、本当に仲のよい友達だから。

翌日、よく晴れた日差しの中、綺月は部屋の掃除をしていた。と言っても、綺月自身の部屋は掃除をするまでもなく整いきっている。対象は通り向かいの家の二階、桐子の部屋だ。

部屋の持ち主である桐子は剣道部所属であり、今日も練習のため学校に行った。言い方を変えれば、邪魔者がいなくなっただけのチャンスなのである。

だいたい放置されたであろう床に掃除機をかけ、雑然と置かれたものの数々を整頓し、そこら中に引っかけられている洋服をハンガーラックに収めた。置いてある意味のわからない空き箱や明らかに古い雑誌などはゴミとしてまとめ、掃除はほぼ終わった。

（ふう、だいたい綺麗になったなあ）

綺月は埃っぽさのなくなった部屋を満足げに眺めながら、ふと、自分で整理したばかりのハンガーラックに目をやった。

（またあんな服買って……）

彼女が溜息をついたのは、並べられた洋服群の中で明らかに異彩を放つ、少女趣味のロリータ服を見てだった。

意匠が凝らされていることから結構な値段だろうに、桐子は綺

月を着せ替え人形にするため、その手の服をちょこちょこ買い揃えていた。実は綺月が衣装持ちである原因の大半は、桐子のこの趣味。買ったロリ服は綺月のクローゼット行きだった。多少背が高いとは言え桐子も着られるサイズなのだが、「この手の服は胸がない方が似合うんだよ」と綺月に着せるばかりである。

(これ、いつ買ったんだろ)

初見の興味から、綺月は白い大きなリボンで飾られた、ライトピンクのコートを手に取った。通常の洋服ではまず見ないケープや、あわせるスカートにはパニエを入れることが前提であろう広めの裾は、確かに可愛い。

ものは試しと、ドア横に置かれた姿見の前で、自身の身体にコートをあてがってみた。

(洋服は可愛いけど、私が着てもなあ)

鏡に映っているのは可愛い洋服と、彼女自身。おとぎ話のように変身でもできれば話は別だが、何を着ようと自分は自分で、さして可愛くもないことはわかっている。そんな現実にも多少の溜息はつきながらも、実は嫌いでもない可愛い服に心を躍らせていたりすると。

「たっだいまー。あは、やっぱり桐子来てたのね」

自分の部屋だから当然だが、ノックもせず突然現れたのは桐子である。気付けばもうすぐ夕方、部活が終わって帰ってくる時間だ。

「お帰り。掃除しておいたから」

「ありがと。あ、その服気に入った？ ちょっと着てみたんだけど、やっぱり私じゃ全然似合わないんだよねー」

「んー、私でも似合わないと思うよ？」

「そうかなあ。私は似合うと思うけどなあ。どう思います？ 先輩」

部屋に入った桐子が招き入れたのは、私服姿の紅深だった。綺月が机上に飾る、あの先輩である。

「うわあ、凄いですっ、可愛いですっ」

目をキラキラと輝かせたその姿は、小さな体躯と相まって大変に可愛いものだったが。

ロリータ服を片手に振り向いてしまった綺月には、その笑顔が凶器にすら見えた。

「んー、先輩はちょっとサイズが違いすぎでしたね。でも、大きめも可愛いですよ」

「ありがとございます。サイズは、はあ。お二人とは二十センチくらい違います」

手元のケーキをつつきながら、女の子同士がしゃべっている。

「なんでこんなに育ってしまったのやら、先輩が羨ましいです」

「いえ、格好良くていいじゃないですか。私なんて未だに、小学生と間違えられることも……」

二人とも顔の造形は整っていて、穏やかなお姉さん風だ。

それだけでも割と注目を集めそうだが、今は、容姿とは若干ずれた可愛い洋服を纏っている。フリルやリボンが多用され、明度の高いふんわりとした洋服。要はロリ服のせいで、注目度はだいぶ乗算されているよう。

さらにもう一人、一言も発せず俯いている女の子と一緒に座っていた。ちょっと高めの身長だが、顔も体型も、洋服にびったり

の女の子。その子が、今、初めて言葉を発した。

「ねえ、もう帰ろうよう」

同時に上げた綺月の顔は真っ赤で、今にも泣きそうである。

部屋で衣装合わせ紛いのことをしていたのがバレた時点で、彼女はだいたい弱っていた。それを見て喜んでしまったのは桐子と、意外にも紅深だ。「私も着てみたいですよ」と口にした後、紆余曲折もなく、ごくごく短時間でお出かけ、駅前ファミレスでおしゃべりと相成ったわけである。

「せっかく懂れの先輩とデートなのに、何を暗い顔してんのよ」

「ちょ、ちょと、なななに言ってるんのっ」

しれっとそっぽを向きながらとんでもないことを言う桐子のせいで、綺月は紅深の反応が気がでない。上目遣いでそうと覗いてみると、紅深もどちらかと言えば桐子のような人柄、冗談には喜んで乗るタイプらしかった。尤も、綺月にしてみれば冗談ではないのだが。

「私が懂れの先輩ですか？ うああ、嬉しいですよ」

「そうなんですよう、昨日も先輩と二人きりで実は大喜びだったんですよ？」

「あ、そのことをすっかり忘れておりました」

桐子の話に応答した紅深が、身体ごと少しだけ角度を変えて、左正面の綺月の方を向いた。満面の笑みとともにあった瞳が、少しだけ真剣みを帯びているようだ。

「佐川さん、お身体は大丈夫ですか？」

突如話を振られてビックリとなった綺月だが、話が話なのでぐさま答える。

「だ、大丈夫ですっ、全然問題ありませんっ」

もちろん本当に問題はなかったのだが、緊張と心配かけまいとする雰囲気とが強すぎることに、紅深は不安の念を抱いた。

「本当に大丈夫ですか？ その、ご迷惑をおかけしてこんなことを言うのも何ですが、どこか痛いところがあつたら、必ず病院に行ってくださいね」

彼女にはほぼ百パーセント、問題ないであろうことがわかっている。それでも心配する一因は、自らの過失により引き起こされた事件が、彼女に負担を強いたと考えているからだ。

昨日、綺月は、紅深も関わるある事件に遭遇した際、気を失って倒れてしまった。その時に付き添っていたのが紅深で、今日も引き続き心配して様子を見に来たらしい。

「そ、そんな、迷惑だなんて、本当は先輩の方がずっと大変なの……」

昨日の事件には今キーキをつついている三名、全員が多少なりとも関わっている。しかしその関わり方は三者三様で、見方は全く異なっていた。

「私には全然、大変なことなんてありませんから。気にしないで大丈夫ですよ」

「でも……」

事件に対して積極的に関われなかったことに、悔しさと責任を感じている綺月が食い下がったが、今度は桐子によって退けられた。

「もう、昨日の話はやめ。二人とも無事だったってことで、いいじゃないですか」

それぞれに目配せしながら、桐子は手を挙げて店員を呼び止めていた。

「はいはい、レアチーズケーキ三つうー」

そして桐子が注文する横で、紅深も綺月に、小さな声で。

「そうですね、せっかく無事だったのでですから、暗くなるのはよしませうか？」

首をわずかに傾げながら微笑む紅深の姿が、綺月の胸をとくと高鳴らせた。

その後は元通りに、桐子と紅深は楽しそうにおしゃべりしていて、綺月も恥ずかしそうにしながらちよつとだけ加わったりして。周りがすつかり暗くなるまで過ごした後、今は駅前でもまた注目を集めているところである。

「洋服は明日、学校で返してくれば結構ですから」

「いえ、ちゃんとクリーニングしてから」

「いいんですつて、ほら、綺月なんかそのままの方が喜びますので」

「えっ？　そ、そんな、違いますから。あの誤解しないでくださいっ」

「なんだよー、おもしろくない」

「んー、それでしたら、お言葉に甘えて」

「さすが先輩つ。話がわかります」

桐子は嬉々として返すと、横でおもしろみを減ずる発言をしようとする女子一名を抑え込んでいる。紅深にはその姿がとても楽しげに見えて、この場を離れ難かったけれども、時間も時間なので思い切って踵を返した。

「では、電車もまいますので。この辺で」

「はい。また明日あ」

「あ、つ、先輩、さようなら。さっきのは違いますからあつがう」

綺月の言葉は桐子の手にも阻まれてしまう。

綺月の首を抱き寄せ口を塞ぐ桐子。そんな光景が今日の格好に似つかわしくないと、数歩離れた紅深はふと思い。

（こんな休日も、素敵ですね）

思わず右手をぶんぶん振って、また明日の挨拶を返した。

二人がキスをした先週の土曜を境に、あるいは三人が着飾って外出した日曜を境にこちら数日間。綺月の隣に紅深がいる機会はすっかり増えていた。

と言ってもクラスも学年も違う二人なので、一緒にいるのは下校の時ぐらいたが。紅深はわざわざ綺月の教室まで迎えに来るため、ここ最近仲良くなったらしいことは誰の目にも明らかであった。

「綺月いー、お姉様が来てるぞー」

廊下から入ってきた長身の男子、穂積博徳が、鞆ほづみに教科書を詰める綺月に声をかける。

博徳は綺月、桐子と同じ中学校の出身で、いわば仲良し三人組みの一人。陸上で鍛えられた健康的な身体と、端正な顔立ちのなかなかいい男である。

「あ、うん。今行く」

「はあ。このシチュエーションは羨まざるを得ないよなあ」

いそいそと帰り支度を進める綺月を、博徳は壁により掛かりながら、ジト目で眺めていた。そして、溜息とともに独りごちると、いつの間にか隣に並んだ桐子が答えた。

「私もわかるわ、その気持ち」

「お前にだけは言われたくないなあ。相変わらず綺月と寝てるんだろ？」

「誤解を招くような言い方はやめてよね」

「誤解かねえ。ま、綺月の方は、違うんだろうが」

全く目を合わせることもなく、二人とも綺月の一挙手一投足を見守りながら話している。普通の声で。故に一メートルも離れていないところにいる本人にもよく聞こえてしまうわけだ。

「もうっつ、二人ともっつ！ 聞こえてるよっ」

ボタンと革鞆を閉じた綺月がぐるりと振り返ると、怒ったような、はにかんだような中途半端な表情をしている。それがまた、向かいの二人にとっては良質の餌である。

「そんな嬉しそうな顔して言われてもな」

「だよねえ。早く帰れ帰れー」

犬猫を追い払うかのように「しっしっ」と手をはためかす桐子。意味ありげに薄笑いを浮かべる博徳。そして教室の中にトコトコと入ってくる、紅深。

「こんにちは」

紅深は二人の前で立ち止まると、丁寧に一礼した。

三人は紅深のことを、いわゆる優等生だと思っていた。たおやかな立ち居振る舞いと丁寧な言葉遣いが主にそう思わせていたのだが、どうやら、単純に優等と言ってしまうには問題があるらしいことにここ数日、気付き始めていた。

「こんにちは。今日もお迎えですか？」

「はい。迎えに来てもらった方が嬉しいのかなあと思いました」

博徳の問いに臆面もなくそう答える。品行方正を身の上とする優等生であれば、こうは答えない。かといっていわゆる年上のお姉様らしい、狙っての発言かどうかは怪しい。桐子と博徳が目下調査中のところだが、彼女の特質は今ひとつ掴み切れていない。

「確かに、綺月は甘えんぼさんですから」

「それは気付きませんでした。では、たくさん甘えさせてあげることにします」

この手合いをからかっても全くおもしろくない。ので、二人の視線は常に綺月を向いている。紅深とのやりとりで間接的に弱る

彼女を見て楽しもうというわけだ。

しかしいい加減、その手口も見え透ってきた模様。当の綺月は知らん顔して廊下へと歩み、振り返りもせず。

「先輩、帰りましょう」

「あ、待ってくださいあい。では、お二人とも、失礼いたします」
また丁寧にお辞儀をすると、紅深は綺月の後を追って教室を去った。

残された二人は、さっぱりわからんといった風で。

「二人きりでも、あんな感じなのか……?」

「さ、さあ。日曜日に会った時はもう少し軽い感じだったから、今のは一応、校内仕様なんだと思うけど」

「顔より身体の方が適切、と」

「いや、別に、見た目と性格は繋がらないと思うよ……」

笹原紅深という人物が如何なるものか、二人にはしばらく、わかりそうにないと思えた。

教室を出た二人は、友達同士と言うに相応しく、他愛もないおしゃべりをしながら駅までの道を歩いた。

しかしこの光景、綺月にしては珍しいものであった。むしろ、紅深と帰るのが珍しいのは言うまでもないが、そもそも誰かと一緒に帰っていることが珍しい。仲のよい桐子と博徳が部活をやっていたためもあり、綺月は大抵、一人で帰途についていた。

一人が好きになわけではなかったので、ここ数日は相手が紅深であることとあわせて嬉しそうだった。

彼女たちが学校から歩くこと十数分、駅の改札を通り、上下線

を分かつプラットホームの上に立つと。すぐさま、紅深の乗る二番線の電車が滑り込んできた。

「それでは、また明日」

「はい。また明日」

開かれたドアの向こうに乗り込んだ紅深は、くるりとこちらを向いて、手を振ってくれている。綺月も小さく振って答えた。ちょっと恥ずかしいけれども、とても嬉しい。

程なくしてドアは閉まり、紅深を乗せた窓はすうっと乗り場から離れていった。動き出した電車の、一つ後ろのドア越しには、仲良く立っている男女が見える。

(嘘をつき続けてくれればよかったのに)

紅深が一度だけ、綺月と同じ電車に乗ってくれた時のことを思い出しながら、つい口にしそうになった我が儘に綺月は慌てた。

(って、何考えてるんだろ。バカ)

自分の知っている自分でなくなってしまったことが、善し悪しはともかく、あってはならぬことのように思われた。

一方、電車に乗り込んだ紅深の方は、よく知っているが嫌いな自分と、向き合うことになっていた。

「隊長、お久しぶりです」

「その呼び方はやめてください」

そこそこ人はいるものの、予定通り座席に腰掛けた紅深に、隣の男が話しかけた。話しかけたと言っても、お互い、虚空を眺めたまま無駄話の様相だ。

「申し訳ございません」

「それと敬語、今は逆ですよ」

「これだけはお許しを」

時に小学生にすら見間違えられる紅深の隣に座っているのは、非常にがたいのいい男。二十代後半だろうか、割と落ち着いた風だが、いざとなれば人の十人や二十人を薙ぎ払えそうな体格である。ライトグレイのスーツ姿が全く似合わない。しかし表情に棘はなく、隣の女の子と話していても犯罪っぽさがないのは彼にとって幸いだったろう。

「仕方ありませんね。早速ですが本題です。わかりましたか」

「残念ながら。しかし何かあることは掴んでいます。特務の人物部隊がまるまる消えたそうです」

「なるほど。この前のはそれですか」

「かも知れません。あらゆる記録がなく、まさに消えたそうです。力及びませんでした」

近くに座っていれば十分聞こえる大きさの声で、二人は会話していた。しかし短文ばかりの内容は、当人たち以外が聞いてもわからないであろう。特に秘密の話というわけではなさそうだったが、余計なことを言うのはよしとしない風でもあった。

「彼女の方からはどうなんです？」

「何も。先ほど見て改めて確信しました、彼女自身には何もありません」

「困りました……」

「お手伝いできることはありませんか」

「斥候を貸していただけませんか。私も警戒はしています」

「わかりました。二十四時間以内に一番優秀な奴らを。連絡は？」

「危急の場合にのみ、私に直接」

「その時までには区別もつかぬようにします」

「お願いします。それと、近くにひよっこがいます。確認してくださいませんか」

「十二時間以内に連絡なき場合は、問題ないものとお考えください」

「わかりました、賢明です」

トントンとテンポよく言葉が交わされていたが、ここで止まった。おそらく話すことがなくなったのだろう。

車掌のアナウンスとともに減速する車内で、男はゆっくりと立ち上がった。頑丈そうな身体は伊達でなく、減速による慣性や揺れにもびくともせず、実になめらかに膝を伸ばした。

そして徐に振り向き、紅深の方を見る時、柔和な表情が綻んだ。

「隊長、お似合いですよ」

「紅深です、笹原紅深。この身体ではもう、隊長なんてできませんよ」

紅深は人なつこく返すと、開いたドアの向こうへ歩いていく男を見送った。

(私なんかのどかいいんだか)

苦笑いをしながら、自らの黒髪を指先で弄んでいる。幼い身体には似つかわしくない仕種だが、今の彼女には不思議としくり来ている。

よく晴れた朝。もちろん雨なら雨でそう言うのだが、学校で勉強しようと思える空模様ではない。せめて昼休みが早く来ないものかと、本分と離れた方向に元氣いっぱい、教室はいつも通りの喧噪に包まれている。

高校生ともなると妙に斜に構えた生徒もいたりするものだが、少なくとも、綺月たちの教室にはいなかった。と言うか、学校全体でもそんな生徒は少なく、みなそれぞれ、好き勝手ではあるものの、明るく学生生活を過ごしているようだ。

チャイムが鳴ると間もなく、担任兼英語担当の先生、荻鏡子おぎきょうこが教室に入ってきた。

「おはよう。はい、みなさあ、今日は静かにした方がいいですよー」

教壇に立つと挨拶に加えて、ちょっと変わった一言だ。

明朗快活、元気なこととはよきことと、生徒が騒ぐことにはさして頓着しない鏡子であったが、今日はどうも特別らしい。鏡子自身の服装も、どことなく気合が入っている。スカートは短め、明るめの装いで、らしくない女性らしさがある。

特に女の子はその辺の眼が鋭い。元気な声がこだまする。

「ほらー、鏡子ちゃんがおめかしまでしてらんだから静かにしてー」

「笠松さんねえ。まあ、その通り。ほら、特に男子、点数稼ぐチャンスだぞーっ。はあい、堤さあ、入ってきてー」

鏡子が右に首を振って、教室のドアから呼び寄せたのは。

真新しい制服に身を包んだ、一人の女の子。

「おーっ」

「可愛いーっ」

「すげーっ」

「うあー」

教室内が一樣にどよめくに至ったその容姿は、まさに美少女。隣で目配せした鏡子に従い、キラキラと輝く大きな瞳がクラス全員と向き合う。そして、挨拶を始める。

「堤エクレアと申します」

「可愛いーっ」

「エクレアあ？」

「あの顔ならありだろ」

「むしろあの胸」

「きゃーっ」

「私と交換してー」

彼女が己が名前を言えば、クラス中のどよめきは加熱し、もはや悲鳴が上がる始末だ。

通常ならば「へんてこな名前」とでも言われかねない、お菓子との同名。けれども可愛い、キュート、ラブリィ、その手の言葉が悉く当てはまりそうな彼女には、びったりの名前と誰もが認める。

「二期期の途中という変わった時期の転校ですが、よろしくお願いいいたします」

妙な盛り上がりの中でも本人は折り目正しく、ぺこりとお辞儀をして、教壇を降りた。

「はいはい。たまには私もそれぐらい褒めてくださいね。まだ十も変わらないんですからねー」

「鏡子ちゃん可愛いよー」

「年齢の割にはー」

「若作り無理あるぞー」

「だから彼氏できないんだよー」

「黙りなさいお子様たちー」と。堤さんの席は佐川さんの隣ね」

先生である鏡子まではしゃぎ気味、教室の熱気が冷めやらぬ中。渦中のエクレアはこれまた女の子らしい綺麗な歩き方で教室の一番端っこ、窓側の席、綺月の隣の席に向かった。

「あーなんで俺の隣しゃねえんだよー」

男子はもれなく落胆の溜息をつき、隣の女子に絶望した視線を送り。

女子ももれなく羨望の溜息をつき、隣の男子に冷たい視線を送っていた。

綺月も例外ではなく溜息をついたが、左隣の席にやってきたのは目下のヒロイン、エクレアである。

「よろしく、堤さん」

本当に可愛いなあと思いつながら、歓迎の挨拶が口をついて出た。エクレアは完璧な美少女だったが、取っつきやすい雰囲気なのだろう。その可愛さに息を呑むというタイプではない。

「よろしく願いましたます、えっと」

「佐川綺月。綺月でいいよ」

「はい。よろしく願いましたます、綺月さん」

ありがちで簡素な挨拶を済ませると、ああなるほどと、周りの、今日からのクラスメイトたちは思った。

腫が大きく童顔な顔は凄く可愛い。胸は制服が崩れそうなほど大きいのに、ウエストはこのクラスの女子誰と比べても細い抜群のプロポーション。個々に見れば完璧な美少女なのだが、あわせるとどこかコミカルと言うか、アンバランスで微笑みを誘うよう

なところがある。女の子であれば誰もが身にしたいと欲するものを、男の子であれば誰もが手にしたいと欲するものを、全て持っているながらも嫌みのない、まさに天性の美少女。

みな早速質問攻めにしたところだが、残念ながらさすがに一時間目の授業が始まってしまい、お預けとなった。

昼食のため屋上へと歩む綺月たち三人の、話題の中心はやはり転校生エクレアだった。

一時間目の授業が終了するやいなや、綺月の隣には人垣ができ、あれやこれやと質問が飛び交った。女子の転校生に飛びつけるのは女子の特権で、男子どもは彼女たちを遠巻きに、ぎこちなく視線を外して様子を覗う。

「ねえねえ、どこから来たの?」

「『エクレア』ってハーフ?」

転校生にはまず、出身地や出生についての質問から。

「今どこ住んでるの?」

「部活とかやってた? もう決めた?」

今現在の彼女のこと。

「彼氏は?」

「うちのクラスの男子どう思う?」

「お化粧なしなのに、すっごい目大きいよねえ」

「胸おっきいよねー。んー、何かカップか想像つかないわ」

「いいなあ、胸大きくする秘訣教えてよー」

「むしろウエスト細くする方法教えてー」

女の子に重要なことまで、思いつく限りの質問をしている。

その雰囲気はどうにも、女子限定なのだ。女子校っぽいと言いか、女の子の生々しい、見てはならない雰囲気、興味津々のはずの男子たちの視線を外させている。ここ、南ヶ丘高校は言うまでもなく共学校。普通、逆に女の子の方が猫被ったりするもんじやないのかと思いつつ、男子一同、悔しい現実には打ち拉がれていたのである。

そんな活況が午前中いっぱい続き、昼休みとなった今。

ようやく男子にも出番が回ってきて、仲のよい女子づてに大きな昼食の輪に入れてもらったり、間接的に話を聞いたりしていた。

逆に女子の特権を誇らしげに見せびらかすように、午前中に得た情報を男子に授けている姿も。今屋上へと向かう三人組において、まさにそれが見られる。

「エクレアちゃんは純然たる日本人なんだってー」

「へえ、そうなんだ。可愛い名前だよね、いいなあ」

物怖じも人見知りもしない桐子は、もちろん午前中、エクレア情報をしっかり入手してきた。それを今こそとお披露目しているが、反応しているのは予想外にも綺月だった。

「って、ちょっと、なんであんたが感心してんのよっ！ さっき聞いてたでしようが」

「ううん、私、避難してたから……。ああいうの苦手で……」

特に人見知りというわけでもない綺月にとって苦手なのは、あの手の子の会話。精神的に純粹培養っぽいところがある彼女は、いくら女の子相手でも、人前で身体の話をしたりするのが恥ずかしい。

「あーもうっ。綺月のそーゆーところが可愛いんだよねえ。じゃ

なくって。ヒロ、あんたに教えてやってんのよ？」

桐子は博徳に上から目線を送ろうとしたが、あっさり交わされる。トントンと先に階段を上り詰めた彼は、屋上への鉄扉を開け、真っ白な光の中に消えてしまった。

「あーっ。無視したーっ。ちょっと待ちなさいよーっ」

桐子は不服な表情で、隣の綺月はのんびり笑顔を浮かべて、薄暗い階段室との輝度差が眩しい屋上へと踏み出した。

コンクリート色の殺風景な屋上ではあるが、晴れた日の昼休みは生徒たちの姿で華やぐ。みな友達とお弁当を広げ、楽しげにおしゃべりをしている。綺月たちも例外ではない。

パクパクとお弁当を口に放り込みながら、お行儀悪く、桐子は引き続きエクレアの話だ。

「ヒロだってホントは知りたいんでしよう？」

「何を？」

一方の博徳は装っているのか本気なのか、全くの無関心。

「エクレアちゃんに決まってるでしょ。あんな可愛い子に興味ないはずがないっ！」

「少なくとも俺はない。だいたい、お前の方が可愛いだろ」

これは明らかに嘘。本音と建て前の区別が付けられない綺月ですら、あっさりわかる程。

「ヒロ、よくそんな嘘が言えるね……」

『嘘』って口にできるお前の方が凄いだろ」

「とりあえず二人とも、あとで覚えてなさいよ」

引きつった笑顔の桐子に、二人は微妙な笑みを返すしかない。

そんなこんなでいつも通りに昼食を終えて、まだ時間のある昼

休みをしゃべったりぼけーっとしたりで過ごしていると。珍しいお客さんが現れた。

「あの、よければ」

話題の転校生、エクレアだった。

声のした方に座ったまま振り向いた綺月の視界には、ギリギリの高さのスカート。

(うああっ、スカートの中見えそうだよ)

他人のことながら視線を泳がせて恥ずかしそうにしている綺月。彼女も同性の女の子、まさか目のやり場に困っているとはエクレアも思わず、まだ慣れてくれないのかなと改めて笑顔を作りながら、何かを持った手を差し出した。

「教科書を見せてくれたお礼です。私の名前と同じ、エクレア。

よかったですどうぞ」

「えっ、私に？」

「はい。綺月さんに。嫌いじゃなかったら」

「ありがとう。甘いものは大好きだよ」

その辺のコンビニで売ってそうな、半透明な包装のそれを、丁寧に受け取る。エクレアの指は細く白い。エクレアのチョココレートとのコントラストが余計に白く見せるのだろう。綺月はその指に見とれながらも、比べるのが恥ずかしい自分の手で、プレゼントを受け取った。

綺月の手に渡ったのを確認すると、今度はべこんと頭を下げる。

「その、ごめんなさい。一つしかないの」

エクレアの行き先を見ていた桐子も博徳も、謝られるんだろかなとすぐに察したが。本当に申し訳なさそうな声を出すものだから少し驚き、桐子の方はどうもってしまい。しかしすぐに気を利か

せるのはこの二人ならではだろう。

「あつ、あ、うん、気にしないでいいから」

「じゃあ代わりに俺からの転校祝い。大したもんじゃなくて申し訳ないけど」

寝っ転がっていた博徳は、立って姿勢を正す流れの中で、桐子の胸元、ブレザーの中にするっと右手を入れる。

(えっ、な、何してるんですか?)

困惑の色を隠せないエクレアを尻目に、博徳は大胆にスナップを利かせ桐子の胸元をまさぐった。

「あんっ」

鼻にかかった桐子の声が発せられる。

(そ、そんなあつ。あわ、どど、どうしよ、う)

見ちゃいけないけどもう釘付け、慌てようにも身体が動かなくて、エクレアは半ばパニック状態で立ちつくす。

彼女の驚きも気にせず、初々しく恥ずかしげな表情を浮かべる桐子の横で、博徳は立ち上がりきる。と、胸元から抜いた腕をエクレアに伸ばして。

「はい、チョココレート」

「びっくりしたー? それ、食べかけだけど、よかったですもらって」

さわやかな笑顔の博徳と、「引っかかったー」と言わんばかりに朗らかな笑顔の桐子を目にして、エクレアはすっかり力が抜けてしまったみたいだ。

「びっくりしましたよお。もう……」

少しよろよろしながら、彼女はポケットサイズのチョココレートを受け取る。その時、ふと気付いた。

(私よりびっくりしてる人が……)

彼女の視線で桐子と博徳も気付いて、慌てて気付きを見ると。

「ちょっと、綺月、あんたがびっくりしてどーすんのよ」

目を見開いたまま、綺月はべたんと鳶座り。つんつん、とつついてみても動いてくれないのではないかと思える硬直ぶりだ。

「おーい、大丈夫かー？」

顔を近づけて呼びかける博徳に、綺月は臉をぼちくり。帰ってきたようだ。

「あ、うん、大丈夫。ホントにびっくりした……」

未だに驚き覚めやらぬ可愛い顔に、桐子も博徳も、エクレアも笑ってしまった。

高く青い空の下、南ヶ丘高校の屋上には陽気な空気が流れていた。

時期外れの話題は、その日のうちに学校中に広まった。

と言うか、要は放課後の部活等での口コミにより、クラス、学年関係なく話題の的となっていた。ルックスに加えて名前までも美少女だったので、そもそも高い話題性があったのは事実だろう。

部活や生徒会に属していない紅深の耳にも、綺月との帰り道に届いていた。残念ながらすれ違いで、綺月を迎えに行った教室でその姿を見ることはできなかったが。

(まさか、ですよねえ)

自宅であるマンションの一室で、紅深はわずかな調度品の一つ、ベッドに寝転がりながら思索を巡らせていた。

(彼女の身の安全も考えるなら、威嚇も含め目立つことは悪い選

択じゃありませんが……。ああ注目されてはいろいろやりにくいのでは……)

忙しく考えながら、無防備に制服を脱ぎだした。

ブレザーのボタンを外し、首元のリボンを解くと、ブラウスのボタンを上から順に外していく。

(女の子同士ならば、一緒にいることもできましようが……。彼のところで一番優秀なら、そもそも全く気付かれないことも可能ですよね……)

先日の依頼の結果が、目の前に起きている状況なのだろうか。それとも、全く別の原因による事象なのだろうか。彼が「隊長」と敬い尊ぶ紅深ではあったが、もはや、今の疑問に答えうる力は持ち合わせていない。

むしろ普通の女の子に近い部分すら多く、考え事をしながらでは自らのしどけない姿にすら気付けないようだ。ブラウスのボタンが完全に外れ、着衣のまま胸をはだけた、悩ましい格好でいると。

——ピンポーン。

部屋の呼び鈴が鳴った。

(珍しいですね)

紅深はひょこっと起き上がり、小首を傾げながらもインターフォンに出た。オートロックのマンションなので、インターフォンにはエントランスの映像が映し出されている。どうやら、宅配便のようだ。

「はい」

「宅配便です」

案の定の答えが返ってくると、紅深は多少の警戒心とともに応

対する。宅配便が送られてくる覚えはない。

「どこからでしょうか？」

「サトウユウコ様からのお荷物で、内容物は食器となっております」

「わかりました。今開けますので、部屋まで持ってきてください」

「はい、解錠お願ひしまーす」

宅配員に問題は感じられない。そう判断した紅深は、慎重になりながらも、迷いなくロック解除のボタンを押した。

(中身は、ろくなものじゃないでしょうね。嫌なタイミングです)
不審な宅配物。

今さっきまで考えていたことと、どうしたって繋がってしまふ。しかし彼女の身に直接、何かが起こることはないだろう。ここは、紅深しかない、紅深の部屋である。どうがんばっても、直接の被害は紅深にしか与えられない。

そう考えると気は楽になるが、神経を研ぎ澄ますべき状況に変わりはない。

胸元に垂れかかっていた真紅のリボンをすつと抜き取ると、まっすぐな黒髪を後ろで束ね、一つ結びにする。セミロングのストリートは自身気に入っていたが、動く時には少々邪魔くさい。

——ピンポーン。

程なくして部屋の目の前に来た旨、呼び鈴が伝える。

紅深は穏やかに扉を開けると、変哲もない配達員のお兄さんが立っていた。

「お届け物です。ここにサインを」

彼はそう言いながら、三十センチ四方の箱の上に、伝票とボールペンを乗せて渡した。

「はい。ちょっと待ってください」

低い身長にあわせ、屈んで差し出された箱の上で紅深はペンを走らせる

「はい。ありがとうございます」

サインを終え、ペンを戻す。と、紅深は臨戦態勢に移行した。目の前の配達員の様子が先ほどまでと違う

(この人の挙動、妙だな)

後ろめたそうに、若干視線を外す。

中身を知っているのだろうか。しかしそうであれば、もっと早い段階でこの挙動に至るのではなからうか。じゃあ、何だろう。疑いを持ちながらも、今ひとつ決定打に欠ける状況。警戒を維持しながら、とにかく荷物を受け取るしかなさそうである。

「それでは、こちらがお荷物です。どうも、ありがとうございますました」

べこりと頭を下げると、紅深から若干外した視線を無理に残しながら、去っていった。

(一難去った、のか)

本題である荷物を手に緊張状態を維持しながらも、少し、胸をなで下ろした。

彼女の安堵は正解と言えば正解である。配達員の挙動不審の理由は、紅深にとって大したものではないのだから。何のことはない、原因は紅深自身だろう。制服の胸をはだけて、アンティークな刺繍やレースの可愛いオレンジ色のブラジャーが丸見え。そんな女の子が目前にいたのである。見たいような、見てはいけないような。彼の行動を説明するのは容易で、また今の紅深にとってはどうでもいいことだった。

部屋の玄関口を閉じた紅深の、次の警戒対象は手に持っている

荷物である。

伝票に記された送り主、佐藤夕子に覚えはない。そもそも、誰にせよ食器を送ってくる当てなどない。

(彼女が狙いだとばかり思っていたが、まさか、私なのか?)

紅深は己が推測に対し正誤を問い直しつつ、箱を床に置いた。左手を上面に添え、右手を箱の角から数センチに近づけると、掌にはすつと、半透明で銀色に輝く、メスのようなものが現れた。流れるように次の動作へと移り、梱包テープで留められた三辺を切っていく。そして、左手で箱の蓋を開けた。

箱の中には梱包材。奥には本当に食器が入っているのかも知らないが。

(ほう、やってくれるな)

ゆっくりと周りを見渡すと、わずかな光芒がいくつか見える。そもそも紅深には、目視せずともそれが何かわかつていた。

——対神術結果。

「私が人間でないという読みは、悪くないがな」

いつの間にもスを収めたらしい右手を前に掲げ、目を閉じる。紅深は結界の持ち主探しを試みたが、当たりなし。スタンドアロンで動いた結界のようだ。

「となれば心配なのは、佐川綺月っ」

気付くのが遅れた自分に舌打ちをし、紅深はバックステップで駆け出すと、部屋から霧消した。

次の瞬間紅深が現れたのは、綺月の目の前だった。

ここがどこかはわからないが、綺月の目の前のはず。紅深は自らの状態を適切に認識し、身体の感覚から足場に問題がないこと

を確認すると同時に、周りに気をやった。

(やはりこちらか。盛大に囲まれているな)

彼女同様に、人間でないものの気配がわんさかある。

綺月は自分の部屋の中にいるようだ。窓からしか外が見えない状況であり、何も知らない彼女にとっては好都合だったかも知れない。外では綺月の部屋を取り囲むように、紅深が敵意を向ける灰褐色の人形、まるでマネキンみたいなものが浮遊している。

人形が思いの外距離を取っていることに紅深は愁眉を開き、もう一つの困難と向き合うことにした。

(後ろ、か)

綺月の目の前に現れた彼女であるから、すぐ側に綺月がいるのは当然である。現在の紅深の視界に綺月がいなくなれば、幸か不幸か後ろにいる。彼女が小さな覚悟を決めて後ろを振り向こうとした時、動く気配が二つ。

一つは綺月。後ろで驚きの声を上げようとしている。けれども現下それに付き合っている場合ではなくなった。

「ダメっ！ 見ないでっ」

咄嗟に叫びながら紅深は数歩後退り、左手を後ろに伸ばしておそらくは綺月の腰であろう部分を掬い上げる。そして強引に自らの腹部に引き寄せた。同時に右手を真正面に伸ばし、いつぞや見せた黒い魔法陣を、掌の先数センチ、部屋の中で展開する。

紅深の左手は抱き寄せた綺月の腰から上方にずらされ、後頭部を押さえるとべたんこに近い自身の胸に埋める。綺月は驚きで何もできぬのだろう、紅深になされるがままだ。

(失せろ)

右腕はピンと伸ばされ、掌とその先の魔法陣は引き続き正面で

開かれ、紅深の冷たく鋭い視線はその指の間を通り数十センチ先を捉えている。そこにはまだ何もなかったが、寸刻の後に屋外を浮遊していたのと同じ人形が、先ほどの紅深の如く突如現れ。次の瞬間、音もなく消えた。

「力の差は歴然だ。引け」

紅深が小声で警告した相手は、外で浮遊し、部屋を取り囲む多くの人形たちなのだろう。彼女の声が影響したかのように、直後、全ての人形が姿を消した。

綺月の部屋からはその一部しか見えなかったが、その気配から全てが消え去ったことを、紅深は感じ取った。しかし、彼女の緊張は全く収まらない。

比較的などと言わずとも、この状況下で厄介なのは綺月の存在。今の体勢が敵しいのは事実だが、動きづらいことは問題でない。綺月にこの事態をどう説明したものか、大問題である。その対処法を紅深は必死で考えているが、さらに状況は悪化しそうだ。

「綺月いー、お茶持ってきたよー、お？」

仁王立ちする紅深がいて。紅深に顔を埋める綺月がいて。綺月の右、つまり紅深の左にある扉を開けた、桐子がいて。

紅深はひとまず、ぎこちなくも左を向いて、桐子に愛想笑いをする。

が。場は余計凍り付いただけ。

綺月にとってはもちろん、多少は耐性のある桐子にとっても大きな衝撃である。綺月が顔を埋めているのは、制服をはだけ、ブラジャー丸見えの、紅深の胸だったのだから。

紅深にとってその服装や胸に抱いている状態はどうでもよかつたが、この場面を誰かに直視されてしまったのは厄介だ。綺月だ

けでなく桐子も加わり、言い訳が余計難しくなってしまったことに頭を痛める。さすれば当然他事に払う注意は薄くなり、彼らはそれを見逃さなかった。

「いけないいっ」

いつもよりワントンポ遅れて気取った紅深には、後の言い訳について配慮している余裕がなかった。多少の穏やかさを取り戻していた表情は、再び色褪せる。感情が感じられぬ瞳は、一瞬でもそれを見た桐子に、恐怖に近い違和感を与えている程だ。

紅深は綺月を抱えたまま身体を左回転、一八〇度翻すと同時に、空いていた右手で桐子の左腕を引つ攫った。彼女の目が見開かれたことを認識はしたが、気にはしなかった。左腕の外れたティートレイはふわりと浮き、紅茶入りティーカップは落下を始め。割れば危険と判断しながら、まずは一瞬でただ彼女を引張り返す。そして小さな身体からは想像もできない力で、無理矢理綺月と桐子を抱き寄せ直すと、押し込めるように二人を座らせた。

数秒足らずの動作を完了させ、紅深の瞳にはいつもの優しさがわずかに戻り、二人に声をかける。

「ごめんなさい。そこでじっとしててください」

彼女の瞳に光が戻ったのは本当に一瞬で、その声が届いた頃、二人に見えていたのは紅深の背中だった。

光なき瞳は再び褐色の人形たちが並んでいる屋外を、視界を遮る壁越しに睨み付ける。そして意識の何分かで背面に匿った彼女たちの位置をイメージし、その周りに可能な限りの防御結界を構築した。

（何とか保ってくれればいいが。殺めるための我が身を、呪う日

が来ようとは)

他者を守るための術に劣る彼女にとって、今は好ましい状況と
言い難い。それでも無表情の顔から、余裕が感じられるのは何故
か。

紅深が敵意を向ける存在、つまり紅深に敵意を向ける存在は、
原因不明の余裕に躊躇しながらも、チャンス逃さぬと一斉に襲
いかかってきた。

部屋の外から、窓の外から、人形がいくつか消える。

同時に、光沢を持たぬ灰褐色のそれが八体、部屋の中に、紅深
の目の前に所狭しと現れた。

対して紅深は。

「身の程をわきまえろ」

小声で警告を発し、両手首を小さく動かすと、半透明の輝き掌
中に出現させる。それは宅配物を開梱した時より若干大きく、果
物ナイフのような刃物に見える。

これから床体操を始めるかのように、トン、と軽くステップを
踏み出し、紅深はしなやかに腕を挙げる。刃物の輝きが、人形の
股間から頭頂まで一直線を描く。その軌跡を境に人形は真つ二つ
に裂け、紅深はそれを確認するまでもなく、また一歩先に身体を
押し出すと、後ろにいた人形をまた切り裂く。綺麗に八度繰り返
すと、部屋の床は壊れたマネキンで埋め尽くされた。

部屋の端っこまで来ると、紅深はくるりと振り向く。力を抜き、
肢体をぶらんとさせ、自らの数歩の足跡を一瞥、全ての人形が動
きを止めていることを再確認した。

同時に、目を丸くして、とにかくその場を見ている二人の姿が
視界に入る。まるで怯えた子猫の如く、二人はいつの間にか抱き合

って、ひどく混乱を来しているようだ。至当な結果に、紅深はど
うしたらよかったのだろうと、今更ふと思案してしまう。

(目隠しをしてあげた方がよかったのだろうか)

紅深が切り裂き壊したのは、二人から見ればただのマネキンだ
ろう。奇異の状況ではあれ、精神的に大きな傷を負うことはない。
頭の中ではそう考えながらも、二人の表情、二人の態度が考えの
誤りを指摘する。しかし何にせよ、もはや手遅れである。

(そうだ、早く状況を終えることが、彼女たちのため)

無防備を思わせていた肢体のうち、左手のみ活性化させ、斜め
右上へと銀色の軌跡を描いた。

「おっと、近寄れば殺されかねないな」

軽めの男の声が部屋に響くと、紅深の描いた軌跡の数センチ先
に、けったいな格好をした男の姿が現れた。ちょうど紅深や、人
形が現れたのと同様に、空間に突如、真つ黒なサングラスと真つ
黒な三つ揃いを纏った、その姿が描かれたのである。声の主であ
ろうその男は、言葉を続けた。

「おとなしくしていれば可愛いものを。とは言えその棘こそがあ
なたらしさ。また今日は一段と悩ましい」

紅深と彼女らとの間に立つ男は、紅深に存外さわやかな笑みを
送りながら、軽薄な科白を言い切る。風体に似つかわしくなく、
柔和な態度である。

男の口ぶりでは、あたかも紅深と知り合いのようだが。紅深は
男に見覚えがなかった。彼女に覚えがないだけである可能性も高
いが、紅深は男を受け入れる理由がないと判断。相変わらずの無
表情で言葉を返した。

「間合いを取ったまではよかったが、おしゃべりが過ぎたな」

そして同時に、男の前半身が消された。言葉通り、前側だけ切り取って、消された。後ろ側から見ている綺月と桐子には、その変化はわからなかっただろう。しかし、紅深からの見栄えは激変し、男の表情はすでに失せていた。見えるのは真っ平らな切断面ののみ。

(私がいることを承知で、この程度の者を使うのはなぜだ?)

不可解な出来事に納得がいけないものの、部屋の外は、人形が現れる前の状況に復帰したことを感じ取った。そして紅深が右腕をわずかに挙げると、人形の瓦礫と男の後ろ半身もその場から消え、ほとんど数分前と同様に戻る。

違うのは、窓際に立つ紅深と、部屋の隅で縮こまる綺月と桐子と、わずかもこぼれず床に落下したらしい紅茶セットがそこに存在していることだった。

数十秒だったか、数分だったか、幾許かの後に、三人は向かい合って座ることとなった。神妙な面持ちで、正座である。

誰が指示したわけでもなかったが、自然とこうなってしまう。桐子が持ってきた紅茶は、きつと冷めてしまっただろう。尤も、誰一人としてそのことを気にしてはいないが、それなりに使える道具ではあったらしい。

「あ、あの、さ、お茶冷めちゃったから、入れ直してくるね」

桐子がそれに託けて、その場を離れた。無理矢理作ったひどく硬い笑顔が、その場の雰囲気物語っていよう。

バカ正直にか、やむを得ずにか、彼女はしばらくしてティーカップを一つ増やした新しいお茶を持ってきた。テーブルはないので、ティートレイに乗せたまま床に置く。そうしてまたしばらく、

無音の時間が経過するかと思われたが。さすがに次の紅茶はないと思いつき、口火を切ったのは桐子だった。

「えっと、その、まずですね。笹原先輩、ボタン……」

桐子が小さく指差す先には、下着と素肌をあらわにしたままの紅深の胸がある。当の本人は何を言われているのかさっぱりわからなかったが、改めて桐子の指先を追ってみて気付いた。

「ひゃんっ、ご、ごめんあさいっ」

紅深はあまりの慌てぶりに舌が回らず、急いで胸を両腕で覆いながら、上体だけを無理矢理捻って隠れるように見繕いを始める。ブラウスのボタンを留め終わると、胸のリボンがないことに気付き、慌てて後頭部に手を回した。やっぱりあったと思いがらしゆるっと解いて、胸元で結び直し、再び身体を二人の方に向けた。

一連の動作に、目の前の紅深に、桐子も、綺月も、なんだかおかしくなってしまう。胸がはだけられた、ひょっとしたらもう少し脱いだ姿よりも恥ずかしいかも知れない格好で、素人目にも全く無駄のない完璧な運動をしていた紅深。それが今、目の前では恥ずかしそうに俯いて、落ち着かない様子なのである。

「先輩でも、慌てることがあるんですね」

桐子の口調は、場の雰囲気同様、だいぶ和らいでいる。

誘われるように、綺月も、紅深も、紅茶に手を伸ばしながら話し出した。

「意外ですか? そんなに落ち着いた子には見えないと思うんですけど……」

「そんなことありませんっ。先輩はとても素敵です。その、凛としていて、でもいつも優しくくて、あっ」

紅深自身の低めの自己評価に反論した綺月は、その弁に力が入りすぎたと気付いて、顔を真っ赤に俯いてしまう。

（案外、この二人って似たところがあるのかもね）

恥ずかしそうにする姿を見て、桐子の口元はつい綻んでしまった。

しかし、これだけで終われないことは、みなわかっている。このタイミングであれば私かなと、桐子が本題を俎上に置いた。

「先輩、いったい何だったんですか？」

彼女の一言をきっかけに、再び空気が張り詰め、三人とも顔に緊張の色が戻った。

いつかは言わなければならぬ。なら今言うことに問題もなからうと、紅深は改めて覚悟した。

「まずは、私のことです。ご覧になったかと思いますが、私は他の人と少し違うんです」

話を一区切りした彼女は、掌を上、右手を三人の真ん中にかざした。

そして突然、先ほど同様、掌に半透明で銀色のナイフが現れた。

「ごめんなさい。もっといいものを出したかったのですが、あいにくこの手のものしか……。佐川さんをご覧になったように、自分自身を転移することもできません」

紅深が説明をまた区切ると、その場から姿を消し、ちょうど彼女の向こう側にあったベッドの上に座っていた。しかも、よくよく見ればベッドから数センチ浮いた状態で、正座している。

「この通りです」

笑えばいいのか、神妙にしていればいいのか、どうしたものかという戸惑いの表情ながら、穏やかに紅深は言い切った。

一方、説明を聞いていた綺月と桐子は、さっき見たから今更とは思いつつも、ホントに消えたり現れたりしていることに驚かざるを得ない。声も出ないほどに。

「えと、そんなに驚かないで欲しいのですが……。私はこの世界で言うところの、魔法使いみたいなものです。ただし、この世界で言われるほど、何でもできるわけではありませぬけど」

小さな笑顔を傾ける紅深に、やっと、驚きの二人も融和というところらしい。桐子などは逆に、これはとてもおもしろいのではないかと思いついてる。そして、ぼちぼち反応も。

「じゃあ、そうですね、例えば、これをケーキに変えたりできません？」

だいたいいつもの調子でしゃべりながら、桐子はポケットのハンカチを取り出して見せた。女の子らしくなく、折り目が揃わぬ畳み方のそれを、お茶の時間にびったりなケーキに変えてもらおうというお願いだろう。しかし、紅深は残念そうに答えた。

「ごめんなさい、私にはできません。それができる魔法使いもいるのですが。私がお二人にしてあげられるのは、こうやって宙に浮かせるくらいです」

一瞬、エレベーターで上昇する時のように身体の重さを感じたが、間もなくいつも通りとなり、二人には自身が浮いているようにすら感じられない。が、確かに下を見ると、床についていない状態が確認できた。

「ホントだ。浮いてる……」

「床と脚の間に手が入るよー」

ちょこまか動いたり、ついには立ったりして、その不思議な状

況を確認する。

確かに、浮いている。そう結論づけるほかない状況に、彼女は紅深の言葉をあっさり飲み込んだ。

「魔法使いかあ、そんなのいるんですねえ」

「そんなの、と言われると少し悲しいです」

「あ、ごめんなさい」

あっさり飲み込みすぎて、すでもう、日常の会話のようだ。

「いえ、まあ、森田さんから見れば、もちろん佐川さんから見ても、私は珍しいでしょうから」

「で、でも、先輩は先輩ですから。その、全然おかしくなんかないですっ!」

どちらかと言えばおっかなびっくりの感があつた綺月も、早速馴染んでしまったようだ。もちろん彼女の場合、想い人たる紅深がなんであつてもという気持ちも、理解を加速したのだろう。

「ありがとうございます。では、続きを説明しますね」

幼さを残す人間ならではの順応性の高さに紅深は感謝しながら、少し険しいその先の説明を続けることにした。

「お二人に説明しなくてはならないことはもう一つあります。大量の人形と、突如現れた黒服の男についてです」

「あー、あの人形、なんか気持ち悪かったです。だよねえ? 綺月」

「うん、なんか、嫌な感じ……。顔がないからかなあ」
 とんでもなく非日常で、非常識な事態だったにもかかわらず、彼女たちにとってはすっかり普通の話になってしまっている。自身の状況をそう思うものはなかったが、慣れとは恐ろしい。

「確かに、あまり質のよいものではありません。あれは人を殺すための道具です」

人を殺す。いくら紅深の口調が穏やかであっても、その言葉の持つ力は強すぎる。綺月も桐子も、顔色は少し曇った。しかし、その言葉の響きは、実感を持つものではなかったのだろう。桐子はすぐ明るい調子に戻っている。

「うあー、それって、ひょっとして、綺月が狙われてるー、とか?」

綺月はまだ少し、言葉の影を引きずっている。

「え、それ、本当ですか……?」

「きゃー、綺月ってば可愛いからねー。いけないことに巻き込まれちゃうのよ」

上目遣いで恐る恐る問う綺月と、冗談に決まってるじゃないと彼女の肩を叩きながらの桐子と。穏やかな笑顔がわざとらしい、紅深。

「本当です」

「え……?」

「……本当、なんですか?」

殺す。その言葉が落とす影は、一瞬にして綺月と桐子を支配した。

とんでもなく非日常で、とんでもなく非常識。そんな事実を説得する力を、紅深の言葉は備えていた。彼女の言う魔法の力なのかも知れない。

「正確に言えば、本当である可能性が極めて高いです。先日より可能な限りの調査、検討を行った結果、佐川さんを狙っているだろうという結論に至りました」

――。
 場は静まり返り、笑顔が消えた。

綺月と桐子は呆気に取られ、聞き間違いですよねと言わんばか

りに紅深を見つめた。特にほんの冗談のつもりだった桐子は、落
差も大きい。まさかと目を見開いている。

悪いことに、紅深にとってもこの事實は辛いものなのか、表情
には悲痛さが透けている。人形や男と対峙した時には完全な無表
情を保っていた彼女が、誰にでもわかるような、辛さを隠す顔を
している。このことは目の前の二人にとって不安を煽るばかり。
しかし彼女自身には予期できていたのか、表情を洗い、気を取り
直す。

「でも、大丈夫です。私が必ず、佐川さんを守り抜きます。ハン
カチをケークに変えられないのは残念でしたけど、私の魔法は、
戦うためにありますから」

続けた言葉とともに戯けた彼女の表情は、あまりに嘘くさい。
けれどもその嘘は、綺月と桐子を心配させまいとするだけの嘘
で。彼女の言ったことに、虚偽があるようには思えない。

桐子はふと、綺月に向けられた、紅深の優しく、まっすぐな瞳
を見てしまう。

(あーあ、この人には敵わないな)

きつと綺月が好きになったこの瞳は、嘘なんかつかないはずだ
と、彼女は思うと。

「そっかー、なんだ、綺月ってば凄いなあ。誰かに狙われて、守
られて、まるでお姫様だよねえ。きつと先輩なら、必ず守ってく
れるって」

誤魔化しではなく、本当にそうしたくて、この場を明るくすべ
く努めることを決めた。そんな桐子の気持ちを知ってか知らで
か、紅深は彼女に助けられながらもハッキリと答えた。

「はい、必ず。この身に代えても」

言い切る凜とした姿は至って格好良く、横で見ている桐子は余
計に勢いづいて。

「きゃー先輩も言いますねー。それで、いったいどうして彼女が
狙われているのですか?」

「まだわかりません。ただ一つ言えるのは、相手はこの世界で言
うところの、神様です」

「えっ?」

神様が人を殺そうとしている。そのことが桐子にも、綺月にも
意外だった。そもそも、神様という存在が出てくる時点で意外な
はずだが、その点はやはり紅深の説明で馴染んでいるらしい。

「神様が、私を……?」

綺月が言葉を発してくれたことに安堵しながら、紅深はできる
限り穏やかに事態を説明する。そこには多くの誤りも含まれては
いたが、わかりやすくするためにはやむを得ないという判断だ。

そもそものを言えば、二人の持っている「神様」知識が誤りだらけ
である。しかし今は、都合のよい前提知識として扱うことにした。

「はい。神様と言えばよいイメージがありますが、実際には人間
同様、善悪緋い交ぜです。仮に神様が正しいだけであれば、この
世界に争いが起きるはずありません」

「ですよねえ。神様がまともなら、こんな可愛い綺月の恋が未だ
叶わないなんて」

「えっ、ちょちょっと、桐子ってば紅深先輩の前だよっ」

空々しくもしみじみ言う桐子に、綺月は飛びかかって口止めし
ようとしている。が、口を滑らしたのは綺月自身。

「あーらら、『紅深先輩』だってさー」

「えっ? えーっ、あーえと、その、うーっ」

「そうですね。もし神様がみな本当に素晴らしい存在なら、誰もが幸せになれるはずです」

真っ赤になって俯く綺月を、紅深は優しく見つめている。

(綺月さんは私を守ります。だからどうか、恋が叶いますように)

紅深が人の話を聞き漏らすなんて、ごく稀なこと。しかし今、

綺月の「紅深先輩」には気付かなかったようだ。

恋の先にあるのは幸せだけではない。そのことを誰よりも知っている魔法使いだからこそ、聴取能力を欠くほどに強く、彼女の幸せを願わずにはいられなかった。

綺月は神様に命を狙われ、魔法使いの紅深は綺月を守る。

突拍子もない説明から数日、彼女たちに大きな変化はない。辛い、再び人形やらが綺月を襲ってくることもないままの数日。多少変わったことと言えば、秋が深まり、朝晩多少ひんやりするようになったことと。転校生のエクレアがすっかりクラスに馴染んだこと。そのくらいだろう。

エクレアについては、クラスに馴染んだと言うより、クラスに浸透したと言えるところもあつたが。帰りのホームルーム前、喧噪に包まれた教室で今まさに、綺月と桐子がそんな話をしているところだった。

「ありゃ絶対ヒロを狙ってるね」

当人たちがいないのをいいことに、桐子はエクレアの腹の中を断定している。

「そうなの？ ヒロにちょっとかい出しているようでもないけど」

「これだから初心者。女の子ってのはね、とても賢いの。狡猾なのよ？ そんなのはほんとしてちゃ女の子はやってけないんだから」

「うー。そんな女の子やだよ」

なぜ桐子はそんな推測をしているのだろうと不思議な顔をしながら、綺月は受け答えていた。その様子は桐子にしてみれば全く信じられないわけで、姉か先輩か、はたまた先生かという調子で綺月に説教している。

桐子の推測たるや実は多数派の主流である。クラスメイト女子一同の予想は、概ねで桐子のそれと一致しているらしい。たまたま通りかかった、近衛律子も綺月を相手に一席ぶつた。

「なーに言ってるんの。将を射んと欲すればまず馬を射よ。ソフト

ターゲットから狙うのが当然でしょう？ 穂積くん狙いであんたに近づいたに決まってるでしょうが。女子の中で、いや、男女問わず、穂積くんが一番仲がいいんだから。まず味方に付けるわよ」

この加勢には桐子も大変満足らしく、妙に誇らしげに続く。

「ほうら、ね？ その辺、綺月はわかってなさすぎ」

「そうかなあ」

「そうなの。見るからにお子様だから、わからなくても仕方ないかな……？」

「ああ、それは言ってる……」

「そ、そんなことないですっ。二人が無駄に育ちすぎなのー」

見た目は美人のお姉さんである二人は、綺月の貧相な体軀を、憐憫を込めて温かく見つめている。その露骨な視線に、綺月は思わず反論してしまいが。それがまたお姉さん二人から見ても、様子っぽかったりするのだろう。

「ま、綺月姫はその清純さがいんだだけどね。私みたいだったら生かしておくわけにもいかなからねえ、取って食ってたわ」

「……本気だ」

「怖いよ、律子……」

綺月と桐子にとって、律子と言えは。かつて保健室で博徳相手に「好きにしていよ」とブラウスのボタンを外したらしい。そんなとんでもない生き物という認識も強かっただけに、今の科白にはちょっと引かざるを得なかった。

律子の一言で場が凍ったままのうちに、当人たちは戻ってきた。と言っても、今の話題を盛り上げる燃料にはならず、二人とも別々にである。

「まだ、彼女は生かしておいてあげましょう」

律子の氷の微笑に、綺月などは女の子の怖さを垣間見た気がした。

その日の出来事を紅深との伝えるのが日課となっている帰り道、今日のお題は先ほどまで話していた「女の子について」。

可愛い後輩が、ちょっと大人っぽい先輩に、嬉しかったこと、楽しかったことを一生懸命報告する。微笑ましい光景ではあるが、綺月と紅深の場合、少々事情が異なる。身長差は十五センチ、綺月の方が断然高い。その上、小学生にも見間違えられることがある紅深の今日の髪型は、幼さ目一杯のツイントール。人が行き交う通学路、誰も気にはしていないが、よくよく見れば誰もが珍妙と思うだろう。

そんな二人だが、その話の内容は、やっぱり先輩と後輩している。

「少し失礼ですけど、綺月さんのことをお子様と言われる気持ち、わかってしまうかも知れません」

「……私、そんなに子どもっぽいんですか？」

先日ふと、綺月が「紅深先輩」と呼んでしまってきた。その場に居合わせた三人は名前前で呼び合うようになっていた。そのことでまた一歩打ち解けた感はあるが、紅深の敬語は変わらず。本人曰く、誰に対しても敬語だとのことで、綺月と桐子は「魔法の国のプリンセス？」などと予想してみたりもしていた。確かに、年相応と言うより、それ以上の言動が見られるところは、プリンセスみたいな英才教育を受けられる環境に育ったことが原因であるとも考えられる。

今の紅深も、ちょっと高校生らしくはないことを言っている。
 『子ども』とは違うと思うんです。むしろ本当は大人なのかな
 って思いますが、私たちがぐらいの年代だと、清廉であることが擲
 揄する対象になったりするのかも知れません」

「やゆ？」

「からかったり、ちょっとバカにしたり、ということですよ。みんな、背伸びしたい、背伸びしちゃう盛りですから。置いていかれないようにとつい言葉に出てしまうのでしょう」

首を傾げて質問する綺月に、視線を進行方向に据え置いたまま、あっさりと答える紅深。穏やかで微笑ましい光景は、二人らしさだった。しかし紅深も、想像の域ですらプリンセス。まだクイーンではない。

「先輩も、ですか？」

「そうですね、恥ずかしいのであまり言いたくありませんが、無理して大人っぽくというのはあると思います」

視線の向きこそ変わらないが、目を合わせないよう、はにかんでみたり。

「……紅深先輩も、『女の子』したりするんですか？」

「え、えっと、その、まあ、そうですね。『周りから』というのもそうですし、別の理由で近づいたり、その、色仕掛けも、時には……」

答えにくいことには、目が泳いでしまったりもしている。

そんな紅深が綺月には意外に映ったのだろう。確かにこれまで、いくつかの紅深の表情を見てきたけれども、頬を赤らめ慌てるなどと言うことは珍しいのだから。もともと紅深「先輩」の印象が強い綺月には意外も意外だ。

「えっ？」

「あ、その、時には、たまに、ごくたまにですよ？ でもほら、男の子って女の子に近づかれるのにとっても弱いので……。その、つい、本当にたまに、ですよ？」

「はあ……。なんか、ちょっとびっくりです。先輩こそ、真っ白なイメージだったんですけど……」

『けど』はいりませんか？ 私はその通り清らかで真っ白です、とは言えません。でもそんなに、慣れてもないじゃないつもりです。……それはそれで、イメージを崩しているのでしょうか」

「あ、えっと、そんなつもりじゃなくて」

「ふふっ、あ、笑ってしまったってごめんなさい。でも、そんなところがお子様って言いたくなっちゃうのかなって」

「あー、先輩までひどいですよう。私で遊ばないでくださいよお」

綺月は頬を膨らませ茶目に不満を口にしながら、紅深の左腕を引っ張って抗議している。一方紅深はおっとり笑うと、左手を置き去りにするかのようにならぬ歩みを進める。

かと思われたが。数歩進んだところで歩みを止めた。紅深はくると翻って、自らの視線と綺月の視線を重ね、心なしかいつもよりもゆっくりと、言葉を綴る。

「……お子様って言う裏には、失ってしまったものに対する羨ましさもあると思うんです。だから、綺月さんは綺月さんらしくいてください。私は綺月さんのそんなところ、好きです」

彼女の穏やかな笑顔には、幾分か緊張が混じっている。けれども不意を突かれ、ただひたすらに驚いている綺月に、そんな機微を察することなどできようもなかった。

「『好き』だってさ。私も、好きです。なあってね」

言葉通り、にやにやしているとしか言いようのない状態。

綺月は帰宅後自室に入ると、制服のまま紅深とともにベッドに倒れ込んだ。と言っても、「紅深」は一枚の小さな写真でしかないが。仰向けで伸ばされた腕の先に、大切な彼女の笑顔があった。

紅深の言った「好き」が彼女の求める「好き」とは違うと、彼女は理解していた。単純に「好き嫌い」の話で、恋愛がどうのという話ではなからう。そう頭ではわかっていたが、やはり「好き」という言葉の力は大きいらしく、彼女は一人恥ずかしげに喜び悶えている。

二年以上も、もう三年近く片想いしている相手に好きと言われて、好きの程度など棚上げで喜ぶのも至極当然。彼女にしてみれば今日が、とても大切な記念日の一つになってしまっしう程である。

紅深の写真をゆっくりと胸に抱いて、綺月は今日の帰り道を思い返した。

(あー、なんかちよっと後ろめたいな)

紅深の写真はずっと飾っていたけど、こうして抱いて触れるのは、今日が初めて。今まではただ単に見るだけで、話しかけたり、抱いたりしたことはないつもりだった。紅深自身の知らぬところで、紅深を自分の想いのままにすることは、紅深を紅深でなくしてしまいう気がしたから。綺月にとって紅深は手が届かない存在。

それは好きだけど告白できない、恋人になれないという意味もあったけれども。紅深は綺月の想像の及ばぬ、憧れの人だと彼女は想っていたから。

だから今までずっと、写真は写真として見るのしか許されな

かった。だから今日、こうして抱えていることは背徳に溢れていた。その背徳を越えて、彼女を抱くことに踏み切らせたのは「好き」という一言だけではなかったのだろう。

(先輩も、色仕掛けするんだって。私にも、もっと近づいてくれないかな)

左腕を抱いて歩いた。それが今日の距離。毎日話をするようになって、下の名前前で呼び合うようになって、身体を触れあわせて歩くようになった。次は、何をできるのかな。

その期待は、お子様と評される彼女らしいものではなかった。故に彼女は、女の子の賢さにも気付いてしまう。

——別の理由で近づいたり

命がけて守ってくれる、魔法の国のプリンセス。それは綺月が恋する、多彩な紅深の一面。「必ず守り抜きます」といった紅深は、綺月の大好きな紅深。だからその言葉に、偽りなどあるはずもないと信じていた。それは揺るぎのないものだったから。

(守るために、私に近づいた。のかな……)

言葉の端々に意図せぬ真実が出てしまうこと。綺月にとってそれは最も気を付けなければならぬこと。紅深に強く恋したあの日から、彼女が絶えず神経を尖らせていたこと。だから、自分以外の、紅深の言葉にも鋭くなってしまっていた。

(紅深先輩は、私が、好き、ですか?)

一転して思い詰めた表情となった綺月が、少しだけ距離を置いた紅深の写真に問うた。しかし答えは、綺月の想いの中ですら返ってこない。

翌日の綺月は、暗澹たる雲囲気を纏っていた。少し前までの、紅深と仲良くなる前までの綺月と比べても明らかな程度であろう。ましてや今や毎日が幸せ曜日、恋愛病に甚く犯された綺月と比べると、落差は大きい。

「あれはいったいどうなってるんだ？」

「それがねえ。聞いても言わないのよ。『何でもない』って答えるばかりで」

朝のホームルームの前、登校直後に気付いた博徳は、早速桐子に状況確認中。教室内の自席で項垂れる綺月に配慮して、二人は廊下で話していた。

綺月の暗い雲囲気は誰の目にも明らか。ここ最近、放課後になると迎えに来る紅深との関係で、彼女が彩られていたのはクラスメイトの多くに知れたこと。今朝の綺月の表情を見て、みな、二人に何かあったのだろうか。もちろん博徳も、である。

「昨日、何かあったのか？」

「うーん、どうかなあ。帰ってからは話してないし」

しかし結局、今朝も一緒に登校してきた桐子ですら、その原因を知ることができなかった。

授業中も休み時間もずっと同じ調子で、綺月はどんより沈んでいる。何かを考えているような表情だが、思い詰めたという風でないのは周りにとって多少の救いだ。

「甘いもの、食べる？」

そう言うって隣のエクレアがキャラメルを差し出すことが、まだ許される容態である。他のクラスメイトも、それとなく、明るくするような振る舞いをしていた。

昼休みになると、いつも通りの三人で昼食を、と思われたが。「ごめん、私、部活の用事があるから」

桐子はあっさり言って、さっさと教室を出て行ってしまった。残された博徳は少々弱ったなという顔で。

（おいおい、気を遣いすぎだろう）

そう思いながらも、綺月と二人、いつも通りの屋上で昼休みを過ごすことにした。

今日も天気はよく、十分に暖かい。冬まではまだ少しあろうというこの季節らしい高い空は、とても明るかった。

一方、言うまでもなく対照的な綺月であったが。黙りを決め込まれては敵わないなと話題を考えていた博徳に、あっさり口を開いた。

「女の子ってさ、難しいよね」

自身のお弁当を口に運ぶわけではなく、ちょんちょんと箸でつつきながら、独り言のように続ける。

「好きでもないのに近づいて、籠絡するなんてさ。私にはできないもん」

「『籠絡』なんて、難しい言葉知ってるな」

博徳は何でもない風を装いながらも、言葉が重くなりすぎぬよう軽くなりすぎぬよう、届くよう傷つけぬよう、細心の注意を払って会話を紡いだ。

「私だって子どもじゃないんだから」

「そうだな。俺たちはもう、子どもじゃないのかもな」

女の子は難しい、逆もまた然りか。博徳はふと、かつて桐子に言われたことを思い出しながら、天を仰いだ。

——そんな時は適当に相槌打ってりゃいいのよ。励ますのはダメ

ね、特に変な理屈付けて励ますのは全然ダメ。

(適当な相槌なんてお断りだろ)

ふっと自嘲気味に小さく笑うと、綺月の話す事情を聞いた。博徳は紅深が魔法使いであること、「綺月を守る」と言ったことを知らないため、綺月が話したのはその辺を適当にぼかして、ではあったが。

そして一通り相槌を打ち終えた博徳は、恋愛のことはわからないかと前置きして。

「押し倒して既成事実でも作っちゃえよ。すりゃあハッキリするって」

随分と忌憚らない、思い切ったことを言って返した。

「何それ？ 犯罪だよ？ そんなの」

「相手が同意すりゃ犯罪じゃないだろ」

「うあー、自分勝手。獣っ！」

軽蔑するかのように博徳を見た綺月の顔は、秋空の下、澄んだ日差しに照らされた。

その表情が少し明るんだのは、きつと、日差しのためだけではないのだろう。

その頃、同じ学校内の中庭では、見慣れぬ組み合わせの二人がいた。

紅深と、雰囲気からは上級生と覚しき女子生徒の、二人。中庭にいくつか設けられたベンチの一つに座り、紅深はブリックパットのコーヒーを飲みながら、女子生徒は膝に乗せたお弁当をつつきながら、よしなしごとを話している様子。

「私がおこに来た理由、わかりますよね？」

しかし傍目からの印象とは違い、紅深は多少の緊張感を持っているらしい声のトーン。

「済みませんが……。私と笹原さんとは、初対面ですよ？」

女子生徒の方はどうも紅深を知らないらしく、緊張というよりは初顔合わせで警戒しているようだ。

お互いの視線はただ単に合わせていないようでありながらも、見えぬ相手に対する感覚を研ぎ澄ましている。しかしそのことは決しておくびにも出さず、穏やかな口調で会話を続けた。

「そうですね。けれども私は、あなたが私のことをわかんと思っているのです」

「えっと、それはどのような意味でしょうか」

比較的紅深は、状況に対し緩やかに構えているようだ。「まあ、そう張り詰めないで」という瞳で女子生徒の方を向くと、逆に女子生徒は訝しむといった調子である。

二人の身長差は小さくないため、紅深が上目遣いで見上げる格好。その目つきは不敵で、年上であるはずの女子生徒にすら多少の威圧感を与える輝きを有している。その格好のまま、紅深はにじり寄り言った。

「あらあら。おぼこにも程があります。それでは、瞳を閉じていただけませんか」

「はい？ なぜ私が……えっ？」

紅深の口調は決して命令ではなかったが、女子生徒はあっさり彼女言葉に従った。と言うよりも、女子生徒の身体があっさり従った。女子生徒は意思とはかけ離れた自身の行動に、驚きを漏らさざるを得ない。

女子生徒の驚きなどに構わず、その結果に紅深は満足げだ。

「安心してください、怖いことはありませんから」

その言葉は純粋に優しさだけで発せられていたが、女子生徒は驚きの中で警戒を解くはずもなかった。確かに、その警戒は正解であったかも知れない。役には立たなかったが。

「……………」

紅深は腰を少し浮かせて、自らの唇を、女子生徒の唇に重ねた。瞳を閉じていたとは言え、小さな呻きは、女子生徒も現況をすぐ察したが故だろう。

紅深の優しい目は開かれたままで、その視界で、まるで金縛りにあったかのように微動だにできなかった女子生徒が、弛緩していく様子を捉えていた。

(やはり、そうでしたか。勘違いではなくてよかったです)

互いの唇を重ね合わせる行為は、穏やかで雑味のないまま、十数秒続いた。

十数秒という時間は、世界が有する膨大な時間の中では、たった十数秒に過ぎないだろう。しかし、キスという行為における十数秒は、決して短くない。

結果として十数秒間は、他者の視線に曝されることを許した。

彼女の行為に関わる事象を、神様の悪戯などと形容できるのだろうか。しかし、そう言うほかにない。

「……………っ。くみ、せんばい……………」

たまたま通りかかった中庭で、想像すら及ばなかった紅深の姿が、綺月の瞳には焼き付けられた。

あとがき

こんにちは。予定通り、みなさまとの再会となるはずの Fukapon です。

今日、五月一日なんですよね。間に合うのか？

この『恋果て止めて』には「苦手な描写や展開を盛り込んでいこう」という自己教育的なテーマがありまして、今回は「女の子と男の子」とか「三角関係？」とかがそれだったりします。触手はなかったけど。

特に三角関係は大っ嫌いなんです。だって、辛いじゃないですか。そんなの見たくないじゃないですか。二人で幸せなだけの方がいいじゃないですか。とは言え、恋愛方面では避けられないのかなあってのもあるので、今回はがんばってみました。そもそも恋愛ものって時点でがんばってみました。いかがでしたか、ちゃんと書いていましたかね？

ところで書いておいて言うのも何ですが、「適当に相槌打ってりゃいいのよ。励ますのはダメね」ってホント？「女の子」って括弧のおかしいんですが、概ね女性はそういう傾向があるような話を耳にします。私なんかは「適当に相槌打たれるのは一番嫌。反論してくれるぐらいじゃないと次の科白も見つからない」って方なんです。そーゆーのが疲れるからダメらしいんですが、私は疲れるのに慣れているので（慣れていなかったら今頃鬱病確

定)、どんな状況でも戦いたい派なんですよね。時々「慰めてもらいたい」とは口にするけど、本当は思っていないと思うのです。こーゆーのって学者の研究対象になりうるのでしょうか。千人規模ぐらいでアンケートとって、数えたらおもしろそうだなあって思うんですけど。それが何に役立つかはわかりませんが、そもそも、学者って役立つようなことやってないでしょ（偏見）。一応私は兼業学生生なので、そーゆー研究をする機会にありつこうかな、と思っただけです。まあ、五年後くらい？

さて、次回予告。現時点で『恋果て止めて』は次の第三巻で完結子定です。「彼女の秘密が」とか「彼女と彼女は実は」とかあったりしますが、細かいところはまだ考えていません。初めて、あんまり幸せじゃないエンディングにしてみるのは、無理だと思うけど。幸せって何？ みたいな感じはありかな。

第三巻はちょっと時間を置いて、十一月のコミティアで発行予定です。夏はミシンを踏むのに忙しいのですよ。ってのと、もう一つ、書きたいものがあるので。今年は弾数で勝負とか言った記憶がありますからねえ。やらんとね。

イベントとしては、次は来週のコミックワールド山梨76、その次は今月末の杜の奇跡12ですか。忙しくて旅行に行けないので、イベントで無理矢理地方に行こう作戦ですよ。よろしければ、遊びに来てください。いつも暇しています。いつでも大歓迎です。

二〇〇八年五月、ファンの回転数が上がり気味の作業室にて。

恋果て止めて (2)

Fukapon

2008年5月5日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2008 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>